

# 大学生における自己愛的自己調整からみた怒りと抑うつ<sup>1)</sup>の発生過程

長尾 博

## The Developmental Process of Anger and Depression from Narcissistic Self-Regulation Perspective among University Students

The purpose of this study was to investigate the developmental process of anger and depression from the narcissistic self-regulation perspective among university students. 204 university students (96 males and 108 females) completed the following 8 scales: narcissism (Nakayama & Nakatani, 2006), self-esteem (Rosenberg, 1965), certainty of self-esteem, threatened feeling for evaluation by others, Baumtest, self-enhancement (Taylor et al, 1995), locus of control (Rotter, 1966), and anger and depression (POMS-2, 2012). Results were summarized as follows. In Study1, the developmental process of male students' anger and female students' depression could be explained by threatened egoism model (Baumeister, et al, 1996) and the criterion for dividing maintenance or decline of self evaluation by others' evaluation was found certainty of self-esteem. In Study2, on the basis of social cognitive self-regulatory model (Rhodewalt, 2001), Male students expressed the contradiction between conscious and unconscious self-esteem as grandiose self, while female students expressed the contradiction between conscious and unconscious self-esteem as hypervigilant self. And highfrequency expression of self-enhancement and attribution of external causes were related to the degree of anger and depression after others' evaluation. These results suggested successfully treating students for anger and depression.

Key-Words : anger and depression, narcissism, threatened egoism model, social cognitive selfregulatory model, university students

### 問題と目的

本研究は、大学生の自己愛的<sup>1)</sup>自己調整 (narcissistic self-regulation) からみた怒りと抑うつ<sup>1)</sup>の発生過程を明らかにするものである。ここ 20 年間の青年の特徴として、中学生の不登校の増加 (文部科学省, 2017)、非行の減少 (警察庁, 2009)、また、大学生の場合、抑

うつ状態の増加 (Tomoda et al, 2000)があげられ、怒りや攻撃行動は、減少傾向であるが男子の方が発生しやすく (竹端・後和, 2017)、インターネットによる攻撃的表現が目立っている (藤・吉田, 2009)。このような特徴を忠井 (2005) は、現代青年の自己愛的で現実回避傾向ととらえている。とくに大学生の場合、この自己愛傾向が強いといわれている (生地, 2000; 上地・宮下, 2004)。

自己愛傾向という観点からみた大学生の怒りや抑うつの発生過程はどのようなものであろうか。自己愛とは、自己像がまとまりと安定性を保ち、肯定的感情に彩られるように維持する機能と定義されており (Strolow, 1975)、Gabbard(1989)は、自惚れと傲慢な誇大性<sup>2)</sup>

(oblivious) 型と他者の目や評価に過敏な評価過敏型<sup>3)</sup> (hypervigilant) の2つをあげている。日本人の自己愛の特徴として、評価過敏型が多く (福井, 1998; 西村, 2004)、町沢による臨床経験から男子の場合は誇大性型が多いという。また、松並 (2014) による大学生の調査結果では、男子は誇大性型が多く、女子は他者の評価に過敏な依存型が多いことが明らかにされている。また、中山・小塩 (2007) による大学生の調査結果では、パス解析から評価過敏性の強さによって怒りや抑うつの強さが予測できることが示唆されている。このようなことから、わが国の大学生の特徴として、自己愛内容に性差があり、評価過敏型が多いことがとらえられる。このことをさらに明らかにするために一定に自己評価を保とうとする自己愛的調整に関する2つのモデルをあげたい。

Figure1 は、Baumeister<sup>4)</sup>, Smart & Borden(1996)の自己本位性脅威モデル (threatened egoism model) である。このモデルはアメリカでは攻撃性に関する研究として展開されている (Baumeister & Campbell, 1999; Cale & Lilienfeld, 2006)。

このモデルは自尊感情<sup>5)</sup> (self-esteem) が高い者を自己愛的な者ととらえ、Figure1 に示すように非現実的に高揚し不安定で不確かである自尊感情と他者からの否定的な評価とのギャップが自我脅威として認識されることにより、その後の認知、感情が導かれ、行動が動機づけられるという過程を想定している。つまり、自尊感情の高い個人では、自己評価が高いにも関わらず、それを支える明確な理由や根拠がないために他者による否定的評価が自尊感情を低下させる原因となり、自我への脅威を感じやすい。その結果、他者評価を受け入れない者は、怒りや攻撃が生じ、受け入れる者は、抑うつ状態やひきこもりが生じやすいというものである。わが国では、阿部・高木 (2006) が大学生と専門学校の学生を対象に自己愛傾向と怒り表出の正当評価についての実験を行い、優越感・有能感<sup>6)</sup> が高い者ほど怒り表出の正当を評価しやすいことが明らかにされており、仙波 (2016) は、成人労働者の17名にこのモデルに基づいて半構造化面接<sup>7)</sup> を行い、高い自尊感情、その評価の不安定性、上司からの評価のズレが自我脅威を生じさせることを明らかにし、さらに仙波 (2018) は、714名の成人労働者に対して調査を行い、共分散分析を用いて高い自尊感情が上司の低い評価によって自我脅威を生じさせることを検証している。しかし、Figure 1 に示す自己評価維持と自己

評価低下とに分かれる「選択ポイント」の具体的な要因が明確にされておらず、また、自己本位性脅威モデルの性差<sup>8)</sup>についても明らかにされていない。

自己本位性脅威モデルは、自己愛の対人的自己調整モデルであるが、もう1つ Rhodewalt (2001)の自己愛の社会・認知的自己調整モデル (social cognitive self-regulatory model) がある (Figure2)。Figure 2の自己知識とは、理想自己や現実自己をふくめた認知的自己をいい、自己評価取り入れは、自己に対する価値観をいう。自己調整とは、自己評価が一定に維持できるようにしていくことをいう。これら自己知識、自己評価、自己調整は、相互に関連し合い、3点は、外界の対人関係などの社会的相互作用の影響を受けているというモデルである。とくに自己評価については、自己愛の強い者は、肯定的で確信的な自己評価であるという結果 (Rhodewalt & Morf, 1995)と自尊感情は変動しやすいという結果 (Rhodewalt, Madrian, & Cheney, 1998)、あるいは自己評価について防衛的<sup>9)</sup>である (Rhodewalt, 2001)という3つの説がある。防衛的自己評価説について Jordan, et al(2003)は、潜在連合テスト (IAT ; implicit association test)で測定した無意識水準の潜在的自尊感情<sup>10)</sup>と意識水準の自尊感情の程度の差をとらえて、潜在的自尊感情の低さが高い意識的自尊感情と結びついて自己愛を高めさせているのではないかと説明している。

この社会・認知的自己調整モデルの特徴として、個人内方略と対人的方略の2つがあげられている。個人内方略は、自己高揚感<sup>11)</sup> (self-enhancement ; John & Robins, 1994 ; Rhodewalt, 2001)があげられ、対人的方略は、他者卑下 (belittle others; Kernis & Sun, 1994; South, Oltmanns, & Turkheimer, 2003) や外的原因帰属バイアス<sup>12)</sup> (attribution bias; Emmons, 1987)などがあげられている。しかし、社会・認知的自己調整モデルは、Figure 2の社会的相互作用がどのような内容であれば自己調整機能が働くのか、また、個人内や対人的方略がうまくいかない場合にはどのような行動や感情が生じるのかについて明確には説明されていない。

本研究の目的は、既述した自己本位性脅威モデルと社会・認知自己調整モデルの問題点に基づいて以下の仮説を想定し、これらの仮説を検証することによって大学生の怒りと抑うつ<sup>13)</sup>の発生過程を明らかにすることにある。仮説1 ; 町沢(2005)や松並(2014)の結果から、男子の方が自己愛の誇大型が多いこと、北村(2011)による大学生の自尊感情の変動に関する研究から男子の方が弱い自己を隠し自尊感情の安定性を保とうとすること、及び竹端・後和(2017)による調査から、大学生の場合、男子の方が怒りや攻撃性が生じやすいことを根拠に大学生の男子の怒りや攻撃性の発生過程は、自己本位性脅威モデルによって説明できるであろう。仮説2 ; Rhodewalt & Morf (1995)の研究結果で自己愛の強い者ほど自尊感情の程度に強い確信があることが明らかにされていることから、自己本位性脅威モデルにおいて自我脅威が生じて自己評価を維持するか、あるいは自己評価を低下させるかの「選択ポイント」要因は、自尊感情の確信度であり、その確信度が強いほど怒りを生じさせ、弱いほど抑うつ

状態を生じさせるであろう。仮説3；Rhodewalt(2001)や Jordan et al(2003)の研究結果で自己愛の強い者ほど低い潜在的自尊感情と高い意識的自尊感情とのズレがあることが明らかにされていることについて、わが国の大学生の場合には、町沢(2005)や松並(2014)の結果から自己愛の性差が示されていることを根拠に男子の場合、低い潜在的自尊感情と高い意識的自尊感情とのズレは誇大性の強さとして示され、女子の場合は、このズレは評価過敏性の強さとして示されるであろう。仮説4；社会・認知的自己調整モデルから、他者から自己評価にマイナスの衝撃を与えられた場合、個人内方略である自己高揚感が強く、及び対人的方略である外的原因帰属バイアスの強い者は、自己評価を低下させた対象に怒りや攻撃性が生じ、両方略の弱い者は、抑うつ状態を示すであろう。本研究では、仮説1と仮説2は、自己本位性脅威モデルに関すること、仮説3と仮説4は、社会・認知的自己調整モデルに関することから、仮説1と仮説2の検証を研究1とし、仮説3と仮説4の検証を研究2とした。

## 研究1

### 目的

大学生を対象に仮説1と仮説2を検証する。

### 方法

**調査対象** 九州圏の国立大学教育学部2・3年生男子96名と女子108名

**調査時期及び手続き** 2021年3月に (a) 誇大自己性自己愛尺度(中山・中谷, 2006)、(b) 自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982/Rosenberg, 1965)とその確信度を問う尺度、(c) 他者からマイナスの評価をされた場合、John & Robins(1993)は本人にとって重要な事柄に関して、また、Morf & Rhodewalt (1993)は評価した対象に脅威を感じることを明らかにしていることから「あなたにとって、重要なこと、例えば成績、人間関係のあり方、容姿についてなどを特定の人から非難や悪い評価をされたとしたら、その脅威の度合いと次のような感情がその人に対してどの程度生じますか」と問い、脅威度と青年期用 POMS-2(横山訳, 2015/Jovial & Douglas, 2012)の怒り尺度と抑うつ尺度を実施した。

**調査内容** (a) の誇大性自己愛尺度は、Baumeister et al (1996)のいう自尊感情が高い者を Gabbard (1989)のいう誇大自己ととらえ、中山・中谷 (2006) の尺度を用いた。この尺度は、誇大性の10項目、評価過敏性の8項目からなり「全く当てはまる」の5点から「とても当てはまらない」の1点の5件法である。(b) の自尊感情尺度は、現在の自尊感情の程度を見るために用いた。10項目からなり「全く当てはまらない」の1点から「非常に当てはまる」の4点までの4件法である。また、その確信度を「非常に確信がある」の5点から「あまり確かではない」の1点までの5件法でとらえた。(c) の怒り・抑うつ尺度は、

否定的評価を受けたと仮定して、怒りと抑うつ感情がどの程度生じたかをみるために各尺度10項目で「非常に強く感じた」の5点から「全く何も感じなかった」の1点までの5件法でとらえた。また、否定的評価を受けて、どの程度脅威を感じたかをみるために「非常に脅威を感じた」の5点から「何も脅威は感じなかった」の1点までの5件法でとらえた。

**倫理的配慮** 調査実施に先立ち調査目的と内容、研究の意義を説明した。調査への参加は、任意であり、いつでも中断できることを伝えた。匿名で授業時間を借りて一斉に実施した。

### 結果と考察

**各尺度の性差** Table 1 に研究1の各尺度の平均値と標準偏差、及び性差の  $t$  検定結果をまとめた。Table 1 より誇大性自己愛は、男子の方が強く、評価過敏性は、女子の方が強いことが示され、この結果は松並(2014)の結果と一致した。自尊感情は、男子の方が高く、この結果は岡田ら(2015)による多くの自尊感情調査結果の性差に関するメタ分析結果から男子の方が自尊感情が高いことと一致した。また、自尊感情の確信度に関して男子の方が確信度が強く、北村(2011)が男子の方が他者評価をふまえて自尊感情を自己調整しやすいという結果を参考にすると、男子は、自尊感情を一定に保つように確信していく動機づけが強いのではないかということが示唆された。また、マイナスに評価されたことによる怒りは、男子の方が強く、この結果は、竹端・後和(2017)の結果と一致した。また、この結果は、大淵(1985)による男子は親しくない者に怒りを示し、女子は親しい者に怒りを示しやすいという結果<sup>13)</sup>を参考にすると日頃の他者との対人的距離の性差が怒りの程度の性差として反映しているのではないかということも示唆された。また、抑うつ状態は、女子の方<sup>14)</sup>が強く、この結果は、Peden et al(2000)や今野ら(2008)の結果と一致した。また、マイナス評価に対しての脅威度は、女子の方が強く、この結果は女子の方が評価過敏性が強いことと関連しているととらえた。

**各尺度得点の関連性** Table 2 に研究1の各尺度得点間の相関係数を示した。Table 2 から、誇大性と評価過敏性とは相関がなく、この結果は他の研究結果(Emmons, 1987; Hibbard, 1992)と一致した。また、誇大性は自尊感情と正の相関があり、評価過敏性は自尊感情と負の相関が示された。この結果は、Campbell, Rudich, & Sedikides(2002)や Emmons(1984)の研究結果と一致した。また、怒りと抑うつは正の相関<sup>15)</sup>が示され、この結果は、上野・丹野・石垣(2009)の研究結果と一致した。また、男子の場合、誇大性は他の多くの尺度得点と相関を示し、女子の場合も評価過敏性は他の多くの尺度得点と相関を示した。とくに男子の自尊感情の確信度は、怒りや脅威度と正の相関を示し、女子の脅威度は、抑うつと正の相関を示した。このような結果から、各尺度得点の相関についても性差があることが明らかにされた。

**仮説1の検証** 男子の怒りや攻撃性の発生は、自己本位性脅威モデルによって説明できるのかという仮説Iを検証するために自己本位性脅威モデルでいう高い自尊感情を誇大性自

己愛ととらえ、Table 1 に示す男女別の誇大性尺度得点の平均値より高い群を選出した（男子 53 名； $mean=27.12$ 、 $SD=5.95$ 、女子 45 名； $mean=24.16$ 、 $SD=5.00$ ）。まず、男子の高得点群を対象に Amons5.0 を用いて構造方程式モデルによるパス解析を行い、適応度が最も高くなるモデルを検討した（ $GFI=.95$ ； $AGFI=.93$ ； $RMSEA=.03$ ）。同様に女子の高得点群を対象にパス解析を行い、適応度が最も高くなるモデルを検討した（ $GFI=.94$ ； $AGFI=.89$ ； $RMSEA=.08$ ）。この結果を Figure 3 に示した。Figure 3 より、男子の場合、誇大性自己愛の強い者は悪い他者評価によって脅威を感じ（.28、 $p<.01$ ）、この脅威は自尊感情の確信度に影響を与え（.27、 $p<.01$ ）、この確信度は怒りの程度には正に寄与し（.34、 $p<.01$ ）、抑うつ状態には負に寄与する（-.13、 $p<.05$ ）ことが示された。この結果から、仮説 1 が検証された。次に Figure 3 より、女子の場合、男子と同様に誇大性自己愛の強い者は、悪い他者評価によって脅威を感じ（.30、 $p<.01$ ）、この脅威が自尊感情の確信度に負の影響を与え（-.41、 $p<.01$ ）、この確信度は抑うつ状態の程度には負の寄与をするが（-.32、 $p<.01$ ）、怒りの程度には影響を与えないことが示された（.05、 $ns$ ）。このことから女子の場合には、自己本位性脅威モデルによって誇大性自己愛から他者評価、自尊感情の確信度、そして抑うつ状態までの過程は説明できるものの、怒りの発生過程はこのモデルによっては説明できないことがとらえられた。女子の場合、怒りの発生過程が、なぜこのモデルによって説明できないのかについては、後述する自尊感情の確信度の弱さが起因しているのではないかと思われる。

**仮説 2 の検証** Figure 1 の自己本位性脅威モデルにおいて自我脅威が生じて自己評価を維持するか、あるいは自己評価を低下させるかの選択ポイントは、自尊感情の確信度であろうという仮説 2 の検証のために男女込みの自尊感情の確信度の平均値を算出し（ $mean=3.75$ 、 $SD=1.54$ ）、平均値よりも高い群（96 名； $mean=4.89$ 、 $SD=1.23$ ）と低い群（108 名； $mean=3.01$ 、 $SD=1.67$ ）に分けた。高得点群の場合の怒り得点と自尊感情の確信度得点との相関係数を算出したところ有意な正の相関が示されたが（ $r=.26$ 、 $p<.01$ ）、抑うつ得点と自尊感情の確信度得点との相関は有意ではなかった（ $r=-.19$ 、 $ns$ ）。また、低得点群の怒り得点と自尊感情の確信度得点との相関は有意ではなかったが（ $r=.18$ 、 $ns$ ）、抑うつ得点と自尊感情の確信度得点とは有意な負の相関が示された（ $r=-.32$ 、 $p<.01$ ）。この結果から、仮説 2 の通り、選択ポイントは、自尊感情の確信度であり、確信度が強いと怒りが生じやすく、弱いと抑うつ状態が生じやすいことが支持された。阿部・高木(2006)の実験結果で有能感（competence）が強い者ほど怒り表出の正当性が強いという結果を参考にすると自尊感情の確信度の強さは有能感と関連しているとも思われる。

## 研究2

### 目的

大学生を対象に仮説3と仮説4を検証する。

### 方法

**調査対象** 研究1と同様の調査対象

**調査時期及び手続き** 研究1と同様な時期に実施する。(ア) A4用紙に鉛筆で「実のなる木を自由に描いてください」と教示したバウムテスト<sup>16)</sup>、(イ) 研究1と同様に「他者から自分にとって重要なことについて悪い評価や非難をされたとしたら、あなたはそれをどのようにとらえますか」と教示して Taylor, Neter & Wayment(1995)の自己高揚感尺度と、(ウ) locus of control 尺度<sup>17)</sup> (鎌原・樋口・清水, 1982/Rotter, 1966) を実施した。

**調査内容** (ア) のバウムテストは、潜在的自尊感情を測定するために実施した。潜在連合テスト (IAT) は、Greenwald, Mcghee & Schwartz(1998)によって作成された投影法の心理テストであるが、このテストは結果の個人差が大きい、理論基盤が乏しい、実施への意欲や疲労感が結果に影響するという問題点があることから (Gemer et al, 2001)、研究2では、清水・清水・川邊 (2014) の自己愛傾向をバウムテストによって測定した研究結果から Figure4 に示すように描かれた樹幹の横幅と縦幅が長いほど潜在的自尊感情が高いという結果を基準にして潜在的自尊感情の程度を測定した。(イ) の自己高揚感尺度は、社会的・認知的自己調整モデルに基づき自己調整の個人内方略として自己高揚感があげられていることからこの尺度を用いた。この尺度は、3項目からなり「非常に当てはまる」の6点から「全く当てはまらない」の1点までの6件法である。(ウ) の locus of control 尺度は、社会・認知的自己調整モデルでは自己調整の対人的方略として外的原因帰属バイアスをあげていることから用いた。この尺度は、18項目からなり「そう思う」の4点から「全くそう思わない」の1点までの4件法である。得点が高いほど内的統制的 (自己解決傾向) であり、低いほど外的統制的 (他者依存傾向) であるととらえる。

**倫理的配慮** 研究1と同様の説明や配慮をした。匿名性で授業時間を借りて一斉に実施した。

### 結果と考察

**各尺度得点の性差** Table 3 に研究2の各尺度得点の平均値と平均値の性差の  $t$  検定結果を示した。Table 3 よりバウムテストの樹幹の縦幅には性差はないが、横幅は男子の方が長いことが示された。稲垣・上原(2018)の IAT を用いた潜在的自尊感情の研究結果では性差がないことが示されているが、なぜ、男子の方がバウムテストの樹幹の横幅が長いのかについて今後、検討していく必要がある。また、locus of control 尺度得点は鎌原・樋口・清水 (1982) の結果と同様に性差はなく、自己高揚感尺度得点も森岡・石崎・池田(2020)の結果と同様に性差はなかった。

**各尺度得点の関連性** Table 4 に研究 1 で示された尺度得点も加えて研究 2 の各尺度得点の相関係数を示した。Table 4 より locus of control 尺度得点と自己高揚感尺度得点とに負の相関があることから個人内方略と対人的方略とは関連<sup>18)</sup>があることが明らかにされた。また、男子の場合、誇大性尺度得点と自己高揚感尺度得点とに有意な正の相関が示され、この結果から、社会・認知的自己調整モデルであげられているように自己愛の強さと個人内方略との関係が明らかにされた。また、男女とも自己高揚感尺度得点と評価過敏性尺度得点とに有意な負の相関が示されている結果については、鈴木・山岸(2004)による実験結果で日本人の特性として人の目を気にして自己高揚感が弱く、自己卑下的態度<sup>19)</sup>が強いことが明らかにされていることと関連していると思われる。また、男女とも自己高揚感尺度得点と自尊感情尺度得点とに有意な負の相関が示されている結果については、伊藤(1999)の研究で自尊感情が高い者は自己高揚傾向が弱いという結果と一致した。また、男子の locus of control 尺度得点は自尊感情尺度得点と有意な正の相関が示され、この結果は豊田(2014)の結果と一致した。上記の 2 つの相関係数から、自尊感情が高い者は自己愛的自己調整（個人内方略と対人的方略）を行わない傾向があることが示唆された。

**仮説 3 の検証** Rhodewalt (2001)のいう自己愛の強い者ほど低い潜在的自尊感情と高い意識的自尊感情のズレがあることについて、わが国の大学生の場合、男子のこのズレは誇大性の強さとして示され、女子は評価過敏性の強さとして示されるであろうという仮説 3 を検証するために Table 1 に示す自尊感情尺度の男女別の平均値を基準に平均値よりも高い群を選んだ。その結果、男子は 52 名 ( $mean=27.11$ 、 $SD=5.20$ ) と女子 54 名 ( $mean=26.69$ 、 $SD=5.76$ ) であり、この群を Table 3 に示すバウムテストの樹幹の縦幅と横幅の男女別の平均値よりも長い群と短い群の 2 群に分けた。この 2 群間に研究 1 で実施した誇大性尺度得点に差があるかどうか、また、評価過敏性尺度得点に差があるかどうかの  $t$  検定を行って Table 5 に示した。Table 5 の結果から、男子の場合、誇大性尺度に関してバウムテストの樹幹の縦幅と横幅のそれぞれの平均値よりも短い群の方が長い群よりも有意に高いことから質問紙法での意識的自尊感情が高い男子で投影法のバウムテストでの潜在的自尊感情が低い者は、誇大自己が強いことが明らかにされた。また、女子の場合、評価過敏性得点に関してバウムテストの樹幹の縦幅と横幅のそれぞれの平均値よりも短い群の方が長い群よりも有意に高いことから、意識的自尊感情が高い女子で潜在的自尊感情が低い者は、評価過敏性が強いことが明らかにされた。このような結果から、仮説 3 の意識水準と無意識水準との自尊感情の高さのズレは、男子の場合、誇大性、女子の場合、評価過敏性の強さとして示されることが支持された。

**仮説 4 の検証** 仮説 4 の個人内方略の自己高揚感が強い者や対人的方略の外的原因帰属バイアスが強い者は、自己評価を低下させた対象に怒りや攻撃を示し、両方略が弱い者は、抑うつ状態を示すであろうということを検証するために男女込みの自己高揚感尺度の平均値を算出し、平均値よりも高い群と低い群とに分け、この 2 群間に怒り尺度得点、抑うつ尺度得



点のそれぞれで差があるかどうかの平均値の差の  $t$  検定を行った。同様に男女込みの locus of control 尺度の平均値を算出し、平均値よりも高い群と低い群とに分け、この2群間に怒り尺度得点、抑うつ尺度得点のそれぞれで差があるかどうかの平均値の差の  $t$  検定を行った。この結果を Table 6 に示した。Table 6 より、阿部・山口・五十嵐(2014)の研究結果と同様に怒り尺度得点は、自己高揚感尺度の高得点群の方が低得点群よりも有意に高く、また、抑うつ尺度得点は、自己高揚感尺度の低得点群の方が高得点群よりも有意に高いことが示された。また、坪田(2011)の研究結果と同様に怒り尺度得点は、locus of control 尺度の低得点群の方が高得点群よりも有意に高いことが示された。また、樋口ら(1982)の研究結果と同様に抑うつ尺度得点は、locus of control 尺度の高得点群の方が低得点群よりも有意に高いことが示された。これらの結果から、自己高揚感や外的原因帰属バイアスを示しやすい者は、怒りが生じやすく、自己高揚感や外的原因帰属バイアスを示さない者<sup>2 0)</sup>は、抑うつ状態が生じやすいという仮説 4 が支持された。

### 総合的考察

本研究結果は、以下のように要約される。仮説 1 の検証から男子の怒りと男子と女子の抑うつ状態の発生過程は、自己本位性脅威モデルによって説明でき、仮説 2 の検証から自己本位性脅威モデルにおいて他者評価によって自己評価が維持できるか、それとも自己評価が低下するかの選択ポイントは、自尊感情の確信の度合いであることが明らかにされた。仮説 3 の検証から自己愛が強い者のうち潜在的自尊感情が低く、意識的自尊感情が高い者は、男子の場合、誇大性自己愛を示しやすく、女子の場合、評価過敏性自己愛を示しやすいことが明らかにされた。また、仮説 4 の検証から自己高揚感や外的原因帰属バイアスを示しやすい者は、他者からの低い評価によって怒りが生じやすく、自己高揚感や外的原因帰属バイアスを示さない者は、他者からの低い評価によって抑うつ状態が生じやすいことが明らかにされた。

このような本研究の結果を大学生が強い怒りや攻撃性を示したり、抑うつ状態に陥った場合においてどのように活かしていけばよいのであろうか。仮説 1, 2, 3 の検証結果から、他者評価によって怒りや抑うつ状態を示す学生に対して実際は低い潜在的自尊感情にもかかわらず、必死で自尊感情を高く保とうとする自己愛について時間をかけて気づかせ、ありのままの本当の自分を自己受容 (self-acceptance) させていくことが重要ではなかろうか。その方法として、臨床家 Kohut<sup>2 1)</sup> (1971/1995) や Kernberg (1970) の自己愛性パーソナリティ障害<sup>2 2)</sup> (narcissistic personality disorder) に対する心理療法が参考になる。つまり、誇大性自己愛が強く怒りが生じやすい男子に対しては、1対1の関りを原則としてクライエントを共感 (empathy)<sup>2 3)</sup> していき、なぜ、怒りが生じたかをよく聞き、クライエント自身に他者に対する共感性が生じるまで長く関ることが重要である。一方、大学生女子に多い抑うつ状態に関して、まずは抑うつ状態を信頼できる他者に表現させることが重要である。岡野・宮岡 (2015) による女子大学生の調査結果から評価過敏性と精神的健康度とは強く関連があることが示されている。本研究の仮説 1, 2, 3 の検証結果からも評価過敏性は不安定

で低い自尊感情と関連していることが明らかにされた。自尊感情を高める方法の1つとして、Stake, Deville & Pannell(1983)が実証しているように集団での自己主張訓練(self-assertion training)<sup>2,4)</sup>を行うことも効果を生むのではなかろうか。

しかしながら、本研究の問題点は多くある。例えば、調査対象数が少なく特定の大学や学部の結果から結果の一般論は言えない。また、想定法を用いていることの結果の信頼性の問題、また、他者評価からどのくらいの時間を経て怒りや抑うつが生じるのかが曖昧である。さらに他者評価された具体的な状況やその他者とどのような関係なのか。例えば、親密な関係なのか、依存的関係のかなどが不明であることがあげられる。今後は、このような問題点を検討していく必要がある。

Table1

研究1の各尺度平均値の性差

尺度	男子		女子		平均値の差の検定 t値	Cohen's D
誇大性自己愛	52.41	(6.05)	50.54	(6.12)	3.12**	.11
誇大性	26.95	(6.51)	23.86	(6.07)	4.98**	.25
評価過敏性	24.64	(5.72)	26.21	(5.04)	2.96**	.09
自尊感情	25.90	(6.11)	24.08	(6.03)	3.03**	.16
自尊感情の確信度	4.72	(1.02)	2.91	(1.73)	13.91**	.07
怒り	24.63	(7.51)	23.26	(6.09)	2.04**	.13
抑うつ	24.05	(6.08)	27.44	(6.33)	5.55**	.20
脅威度	4.32	(1.00)	4.65	(1.08)	3.30**	.12

注) ( ) 内は標準偏差を示す。

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

**Table2**

研究1の各尺度得点間の相関関係

尺度	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
① 誇大性							
② 評価過敏性	.11 .13						
③ 自尊感情	.21* .20*	-.21* -.25*					
④ 自尊感情の確信度	.20* .09	-.20* -.19*	.21* .10				
⑤ 怒り	.23** .11	-.24** .08	.22* .14	.19* .11			
⑥ 抑うつ	-.10 -.21*	.21* .24**	.13 .20*	-.21* -.22*	.26** .24**		
⑦ 脅威度	.21* .12	.20* .23**	.19* .20*	.20* -.14	.21* .10	.14 .20*	

注) 上欄は、男子の場合、下欄は女子の場合を示す。

\*p&lt;.05 \*\*p&lt;.01

**Table3**

研究2の各尺度平均値の性差

尺度	男子	女子	t 値	Cohen's D
縦幅	10.13	9.64		
バウムテスト	(2.02)	(3.17)	0.15	.23
横幅	12.22	10.98		
	(3.05)	(2.86)	4.27**	.19
自己高揚	12.55	11.20		
	(3.61)	(4.15)	1.55	.07
Locus of Control	46.33	47.11		
	(6.71)	(7.90)	1.08	.11

注) ( ) 内は標準偏差を示す。

\*\*p&lt;.01

**Table4**

研究2の各尺度得点間の相関関係

尺度	①	②	③	④	⑤	⑥
① locus of control						
② 自己高揚	-.24**					
	-.21*					
③ 誇大性	-.19*	.25**				
	-.11	.18				
④ 評価過敏性	.16	-.23**	.11			
	.22*	-.25**	.13			
⑤ 自尊感情	.24**	-.42**	.19*	-.21*		
	.17	-.19*	.08	-.25*		
⑥ 自尊感情の確信度	-.44**	.32**	.20*	-.20*	.21*	
	-.15	.21*	.09	-.09	.10	

注) 上欄は、男子の場合、下欄は女子の場合を示す。 \*p&lt;.05 \*\*p&lt;.01

**Table5**

自尊感情高得点群の樹冠の縦・横幅と自己愛特性との関係

性	バウムテスト 平均値 cm		比較する尺度得点	t 値	Cohen's D
	長い群	短い群			
男子 N=52	縦幅	12.41 (2.33)	8.74 (2.45)	誇大性 2.51**	短い群>長い群 .14
	横幅	14.18 (3.11)	10.11 (3.21)	評価過敏性 1.10	.23
女子 N=54	縦幅	10.00 (3.01)	7.92 (3.66)	誇大性 0.92	.21
	横幅	12.48 (3.92)	8.01 (4.12)	誇大性 1.78*	短い群>長い群 .16
					.17
					.25

注) ( ) 内は標準偏差を示す。

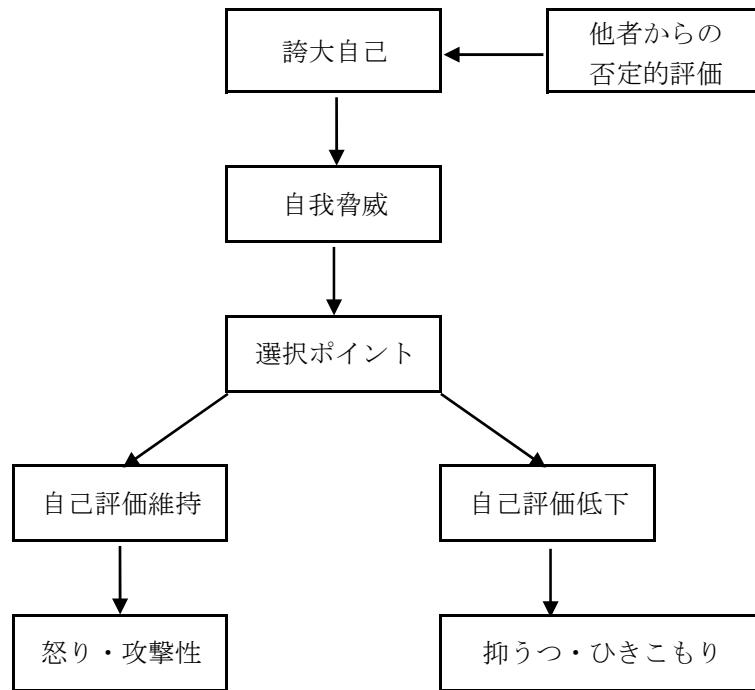
\*p&lt;.05 \*\*p&lt;.01

**Table6**

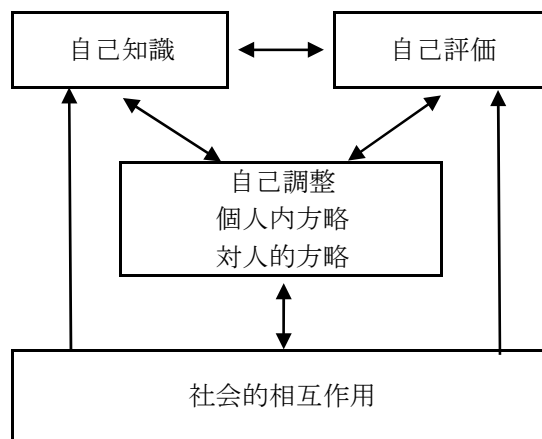
個人内・対人的方略と怒り・抑うつとの関係

尺度	平均値	高得点群と低得点群の平均値		怒り得点平均値		t 値	Cohen's D	抑うつ得点平均値		t 値	Cohen's D
		高得点群	低得点群	高得点群	低得点群			高得点群	低得点群		
自己高揚	12.34 (3.12)	14.10 (3.31)	26.13 (6.32)	23.14 (6.17)	4.98**	.15	23.42 (6.89)	28.18 (6.23)	-7.32**	.23	
		12.13 (3.14)									
Locus of control	46.82 (6.22)	47.81 (6.18)	23.11 (6.76)	26.89 (6.21)	-6.30**	.24	27.11 (5.98)	22.69 (6.35)	7.36**	.28	
		45.86 (5.76)									

\*\*p<.01

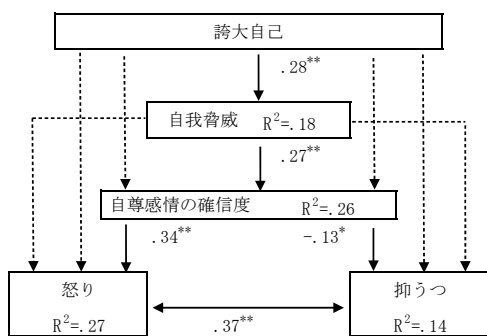


**Figure1**  
自己本位性脅威モデル (Baumeister et al., 1996)

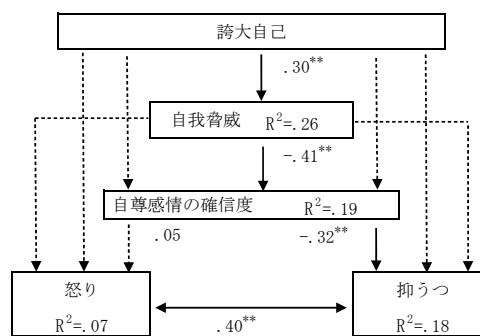


**Figure2**  
自己愛の社会・認知的自己調整モデル (Rhodewalt, 2001)

男子



女子

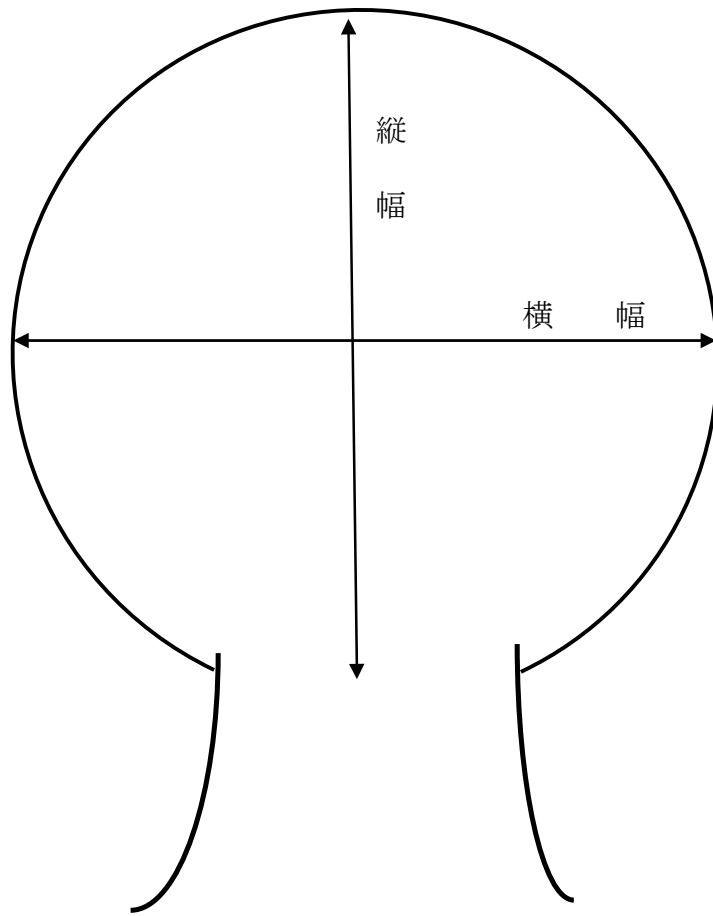


注) -----> は有意ではなかったパス係数 誤差項は省略した

\*p<.05 \*\*p<.01

Figure3

パス解析の結果



**Figure4**  
樹冠の縦幅と横幅 (清水・清水・川邊, 2014)



## <付記>

本研究において、調査に協力していただいた大学の教員、大学生の皆様に深謝いたします。

## 引用文献

阿部裕子・山口映里・五十嵐哲也(2014). 大学生の親友関係における関係高揚と精神的健康との関係 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, **5**, 11—18.

阿部晋悟・高木修(2006). 自己愛傾向が怒り表出の正当評価に及ぼす影響 心理学研究, **77**, 170—176.

Baumeister, R. F., Smart, L., & Borden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression. *Psychological Review*, **103**, 5-33.

Baumeister, R. F., & Campbell, W. K. (1999). The intrinsic appeal of evil. *Personality and Social Psychological Review*, **3**, 210-221.

Cale, E. M., & Lilienfeld, S. O. (2006). Psychopathy factors and risk for aggressive behavior. *Law and Human Behavior*, **30**, 51-74.

Campbell, W. K., Rudich, E. A., & Sedikdes, C. (2002). Narcissism, self-esteem, and the positivity of self-views. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 358-368.

Emmons, R. A. (1984). Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 291-300.

Emmons, R. A. (1987). Narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 11-17.

藤柱・吉田富二雄(2009). インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響 社会心理学研究, **25**, 121-132.

福井敏(1998). 誇大な自己—自己愛性障害 こころの科学, **82**, 75—86.

Gabbard, G. O. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, **53**, 527-532.

Gamer, M. C., Segal, Z. V., Sagratis, S., & Kennedy, S. J. (2001). Mood-induced changes on the IAT in recovered depression patients. *Journal of Abnormal Psychology*, **110**, 282-289.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.

Hibbard, S. (1992). Narcissism, shame, masochism, and object relations. *Psychoanalytic Psychology*, **9**, 489-508.

樋口一辰・鎌原雅彦・清水直治・大塚雄作(1982). 原因帰属様式に関する研究(3) 東京工業大学論叢, **7**, 141-149.

稲垣勉・上原依子(2018). 潜在的自尊心の指標としての名前の選好 鹿児島大学教育学部研究紀要, **69**, 143—153.

伊藤忠弘(1999). 社会的比較における自己高揚傾向の相関 心理学研究, **70**, 367—374.

John, O. P., & Robins, R. W. (1993). Determinants of interjudge agreement on personality trait. *Journal of Personality*, **61**, 521-551.

John, O. P., & Robins, R. W. (1994). Accuracy and bias in self-perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 206-219.

Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 969-978.

鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治(1982). Locus of control 尺度と、信頼性と妥当性の検討

教育心理学研究, **17**, 134—142.

警察庁(2009). 平成 21 年度 警察白書

Kernberg, O. F. (1970). Factors in the psychoanalytic treatment of narcissistic personalities. *Journal of American Psychoanalytic Association*, **18**, 51-85.

Kernis, M. H., & Sun, C. (1994). Narcissism and reaction to interpersonal feedback. *Journal of Research in Personality*, **28**, 4-13.

北村譲崇(2011). 青年期における自尊感情の変動性と関係的自己の可変性との関係 京都大学人間・環境学, **20**, 1-11.

Kohut, H. (1971). *The restoration of the self*. New York: International Universities Press. (コフート, H. 水野信義訳 笠原嘉監訳(1995). 自己の修復 みすず書房)

今野千聖ら(2010). 日本在住一般成人における抑うつ状態の性差に関する研究 女性心身医学, **15**, 228—236.

町沢静夫(2005). 自己愛性人格障害 駿河台出版社

松並知子(2014). 自己愛の病理性の性差 パーソナリティ研究, **22**, 239—251.

三船直子・氏原寛(1991). 青年期の自己愛人格について 大阪市立大学生生活科学部紀要, **39**, 199—213.

文部科学省(2017). 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査

Morf, C. C., & Rhodewalt, F. (1993). Narcissism and self-evaluation maintenance. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **19**, 668-676.

森岡実緒・石崎淳一・池田浩之(2020). 家族関係と自己呈示や自己の非開示の特徴に関する研究 兵庫教育大学発達心理・臨床研究, **26**, 57—64.

中山留美子・小塩真司(2007). 自己愛傾向が怒りと抑うつに及ぼす影響(2) 日本パーソナリティ心理学会発表論文集, **16**, 94—95.

中山留美子・中谷素之(2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究, **54**, 188—198.

西村馨(2004). 尊大で自己顕示的なタイプの状態 上地雄一郎・宮下一博(編) 荒れる青少年の心 北大路書房

生地新(2000). 現代大学生における自己愛の病理 心身医学, **40**, 191—197.

岡田涼・小塩真司・茂垣まどか・脇田貴文・並川努(2015). 日本人における自尊感情の性差に関するメタ分析 パーソナリティ研究, **24**, 49—60.

岡野茉莉子・宮岡佳子(2015). 青年期女性の自己愛の検討 跡見学園女子大学文学部紀要, **50**, 109-123.

大淵憲一(1985). 怒りの経験における男女差の検討 大阪教育大学紀要, **34**, 37—47.

Peden, A. R., Hall, L., Rayens, M. K., & Beebe, L. L. (2000). Reducing negative thinking and depressive symptoms in college women. *Journal of Nursing Scholarship*, **32**, 145-151.

Rhodewalt, F., & Morf, C. C. (1995). Self and interpersonal correlates of the narcissistic personality inventory. *Journal of Research in Personality*, **29**, 1-23.

Rhodewalt, F., Madrian, J. C., & Chenny, S. (1998). Narcissism, self knowledge, organization, and emotional reactivity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 75-87.

Rhodewalt, F. (2001). The mind of the narcissist. In J. P. Forgas, K. D. Williams, & L. Weeler. (Eds.) *the social mind*. Cambridge, UK; Cambridge University Press.

仙波亮一(2016). 自我脅威状況における行動選択プロセスに関する研究, 産業カウンセリング研究, **17**, 17—29.

仙波亮一(2018). 自己愛タイプ別に見た労働者の自我脅威の知覚が対処方略に及ぼす影響実験 社会心理学研究, **57**, 105—116.

South, S. C., Oltmanns, T. F., & Turkheimer, E. (2003). Personality and the derogation of others. *Journal of Research in Personality*, **37**, 16-33.

Stake, J., Deville, C., Pannell, C. (1983). The effects of assertive training on the performance self-esteem of adolescent girls. *Journal of Youth and Adolescence*, **12**, 435-442.

清水健司・清水寿代・川邊浩史(2014). 自己愛傾向と対人恐怖心性がバウムテスト指標に及ぼす影響 信州大学人文科学論集, **1**, 117-125.

鈴木直人・山岸俊男(2004). 日本人の自己卑下と自己高揚に関する実験的研究 心理学研究, **20**, 17-25.

Stolorow, R. D. (1975). Toward a functional definition of narcissism. *Journal of Psychoanalysis*, **56**, 179-185.

忠井俊明(2005). 逃亡者たち ミネルヴァ書房

竹端佑介・後和美朝(2017). 大学生の攻撃性の強さとキレ行動および情動コンピテンスとの関連 学校保健研究, **59**, 89-96.

Taylor, S. E., Neter, E., & Wayment, H. A. (1995). Self-evaluation process. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 1278-1287.

Tomoda, A., Mori, K., Kimura, M., Takahasi, T., & Kitamura, T. (2000). One year prevalence and incidence of depression among first year university students in Japan. *Psychiatry and Clinical Neuroscience*, **54**, 583-588.

豊田弘司(2014). 随伴経験, 統制位置及び自尊感情の関係 奈良教育大学教育実践開発研究センター紀要, **23**, 7-12.

坪田雄二(2011). 帰属と妬みの関連性に及ぼす能力, 努力, 普遍観の効果 広島大学大学院教育学研究科紀要, **60**, 215-224.

上野真弓・丹野義彦・石垣琢磨(2009). 大学生の持つ抑うつ傾向と攻撃との関連 パーソナリティ心理学研究, **18**, 71-73.

上地雄一郎・宮下一博（編）（2004）．もろい青少年の心 北大路書房

山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982） 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

## 注)

1) **自己愛**; Ellis, H. (1898)が青年ナルシシスのギリシャ神話に喩えてあげた語。Freud, S. (1914)は、幼児期の自体愛から自己愛を経て対象愛へと進む一次的ナルシズムと対象との関係を失った病的な二次的ナルシズムをあげた。

Kohut, H. は、1960年代から乳幼児期からの母親との共感を通して、また、父親への理想化を通して、自己愛の発達を論じた。アメリカの心理学者 Rogers, C. R. は、Freud, S. のいうリビドー（心のエネルギー）が自己に留まった自己愛とは逆に他者との出会いや共感を重視した。長尾 (2021)は、現代青年の特徴として、自己愛をあげている（長尾博 2021 青年期自我の時代的変遷 活水論文集、64、23—39.）。

2) **誇大性**; Kohut, H. のいう誇大自己とは、自己を顕示し、自己への確認、承認、賞賛を求める幼似的な自己の状態をいう。歴史的にこの誇大自己がもとで政治闘争、宗教戦争、権力闘争が多く生じている。16世紀のイタリアのマキャベリの「君主論」は、目的のためには手段を択ばない権謀術数を示している。権力のある者が、道徳や倫理に反して行動する思想を「マキャベリズム」という。その背景には、誇大自己がある。

3) **評価過敏性**; 他者や社会から、自分がどのように評価されているかに過敏なことをいう。臨床的には、太ることを気にして拒食や過食になる摂食障害、自尊感情が傷ついたことによる不登校やひきこもり、あるいは日本人に多い対人恐怖があげられる。Benedict, R. の「菊と刀」に描かれている日本人の「恥」の重視は、評価過敏な日本人の特性を示している。

4) **Baumeister, R. F.**; フロリダ大学の社会心理学者。心理学の論文の中で彼の論文は、世界一多く引用されている。意志力についての研究や自我消耗についての研究は有名である。彼は、Bandura, A. のいう自己効力感 (self-efficacy) , つまり、人のもつ「自信」は、仕事やその業績とは関連が弱い、むしろ「自信」は、人の幸福感や「自己愛」を高めやすいといっている。

5) **自尊感情**; 心理学においてよく用いられやすいキーワード。自尊感情は、「自己に対して十分に良いという尊重の感覚をもつこと」(Rosenberg, M. 1965)であり、自己愛は、「他者に対する優越感・有能感に依拠しており、自己の良い面を誇張ないし錯覚することで保たれている」(Rhodewalt, F. 2001)という違いがある。臨床家 Sullivan, H. S. のいう自尊心 (self-respect) とは、自己肯定意識のことをいい、この自尊心は、前思春期の親友 (chum) との対等な関係を通して形成される。Sullivan, H. S. は、治療者のもつ自尊心と対等に患者の自尊心を重視する対人関係論 (interpersonal relationship theory) を唱えた。

6) **有能感**; コンピテンス (competence) という。White, R. W. や Harter, S. が、主観的な自我に関わる有能さを意味する語として名付けた。幼児が、環境に対して、好奇心や探索心を抱いて働きかけ、その反応から効力感を見出し、それが有能感を生み、Bandura, A. のいう自己効力感へと展開する。有能感のうちの万能感や全能感は、乳児に見られ、次第に年齢とともに制限、減少していく。内発的動機付けは、この有能感がもとになっている。

- 7) **半構造化面接**; semi-structured interview とは、質問すべき項目内容は決まっているがそのほかはとくに制限を設けず、自然な会話の流れの中で質問に対する答えを得ようとする面接スタイルをいう。
- 8) **性差**; 性差研究は、性差差別研究につながりやすい (Harris, J. R. 2003)。しかし、時とともに性差は減少している傾向があり (Twenge, J. M. 1997)、性差研究結果を男性と女性が相互に補えることが理想である (Myers, D. G. & Twenge, J. M. 2013)。
- 9) **防衛的**; Freud, S. がいった語。意識化することによって体験する不安、苦痛、罪、恥といった情動や欲動を意識から追い払い、無意識化してしまう自我の働きをいう。Freud, S. の娘のアンナ・フロイドは、適応していくための無意識的な方法を防衛機制 (defense mechanisms) といった。正直、素直な人とは、防衛機制を用いない人のことをいう。
- 10) **潜在的連合テスト**; 言葉 の分類作業を通して、概念と概念との結びつき強さを測定し、無意識的な態度を明らかにしていく方法。Greenwald, A. G. が開発した。
- 11) **自己高揚感**; 自尊感情を維持するために自尊感情を高める情報を集め、低める情報を避ける感情をいう (Taylor, S. E. & Brown, J. 1988)。一方、正しい自己評価をしたくて自分についての情報を集めることを自己査定 (self-assessment) という。personality の変化という視点では、自己高揚感が強い者はいつまでたってもその変化は見られませんが、自己査定が強い者は、personality は、良いように変化しやすい。
- 12) **外的原因帰属バイアス**; Heider, F. (1958) の帰属理論 (attribution theory) の中で悪い結果が出た原因を自分のせいにせず、運や状況のせいにする癖をいう。日本人を対象とした北山(1998)の研究結果では、自分の成功は、運や状況のせいにせず、失敗は、自分の能力や努力不足にしやすいという自己批判的傾向があるという。
- 13) **男子は親しくない者に怒りを示し、女子は親しい者に怒りを示しやすいという結果**; 青年期の友人関係の研究から、昨今の青年は衝突を回避し、関係を維持しようとする傾向がある。関係の維持 (maintaining friendships) の研究では、動機づけ、返報性、目標などの要因が影響している。
- 14.) **抑うつは、女子の方が強く**; 精神医学では、うつ病の発症率は、女性に方が高い。また、大学生のうつ状態と依存性との相関は高く (風間, 2015)、また、依存性は男子よりも女子の方が強いといわれている (竹澤・小玉, 2004)。うつ状態とさまざまな依存症との関係が深いことも知られている。
- 15.) **怒りと抑うつは正の相関**; 怒りを抑圧すればうつ状態となる。怒りは、生理学的にはコルチゾールの分泌が増え、うつ状態は、モレアミンという伝達物質の流れが悪くなる。医学的には、怒りは免疫を低下させ、突然死をまねくこともあり、うつ状態は、本能的欲求を低下させる。
- 16) **バウムテスト**; スイスの Koch, K. が創案した。実のなる木は、自己イメージを想定している。明確な測定指標はない。とくに日本の臨床心理士が活用しやすい。
- 17) **locus of control**; 行動を統制する意識の所在 (ローカス) が、自分の内にあるか、外界の他者や社会にあるかをいう。内的統制型の者は、安定しており、自信があり、我慢強く、適応力があり、外的統制型の者は、思い込みが強く、気分の変化があり、不適応に陥りやすい (次良丸, 1986)。高い自尊感情の者は、内的統制傾向、低い自尊感情の者は、外的統制傾向が強い (Rosenberg, M, 1979)。
- 18) **個人内方略と対人的方略とは関連がある**; 常に自分を見失わず、内省することと人目をいつも気にして自分を見失うこととは逆の関係であることを意味する。Rosenzweig, S. が創案した投影法の絵画欲求不満テスト (P-F スタディ) では、外罰、内罰、無罰と欲求不満状況での攻撃性の表現傾向がわかる。
- 19) **自己卑下の態度**; 従来から日本人の他者に対して自分を卑下して臨む態度が注目されてきた (Murkus, H. R. &

Kitayama, S. 1991)。謙虚、謙遜、謙譲の美と良い評価がされてきたが、欧米の人々にとってはいまだ違和感があるという。

20) **自己高揚感や外的原因帰属バイアスを示さない者**；自己高揚感が乏しい者は、抑うつ状態の者に多いことは明らかにされているが (Golin, S. et al, 1981)、程度の問題がある。程よい自己高揚感をもつ者は、健康的である。

21) **臨床家 Kohut**；アメリカの精神分析学派のなかで自己心理学を確立した。他者と関わる自分を「自己」といい、自己は、人生早期は断片的だが凝集して発達していく。他者を通して映し出される自己を自己対象といい、幼児期に親からの自己対象欲求が拒絶されると攻撃的になるとらえる。また、彼は、自己愛を誇大自己と理想自己に分け、この自己愛は、2歳頃、母親から共感されて中核的自己 (nuclear self) が形成されるという。とくにこの時期に共感されていない場合に心の問題が生じやすいという。この中核的自己は、以後、理想や野心の原型を生じさせていく。

22) **自己愛性パーソナリティ障害**；自分の能力などに対する自己評価が過剰に高く、他者から賞賛されたいという欲求が強いにも関わらず、他者への心情などに共感する能力が欠如している精神疾患をいう。

23) **共感**；クライアント中心療法の Rogers, C. R. のいう共感は、クライアントとの結びつきを深めるために感情側面を共感するが、Kohut, H. のいう共感は、代理的内省 (vicarious inspections) といってクライアントの代わりにクライアントの自己を内省して伝えることをいう。それは、クライアントのもつ破壊性の緩和や自己受容を生みやすい。

24) **集団での自己主張訓練**；アメリカの精神医学では、うつ病に対する集団認知行動療法が盛んである (Shapiro, J. et al, 1982; Covi, L. et al, 1982)。今世紀に入ってわが国でもうつ病に対しての認知行動療法が注目され始めた。個人療法よりも集団療法の方が治療者への依存が少なくなるという利点がある。